

市民のみなさま

世界は今、より大きく、より強く・・・という 20 世紀の夢をもう一度追おうとする勢力と、みんなが主人公感覚をもって等身大で協働し合う、より小さくコンピビアルな社会・国家を創造しようとする勢力とが、拮抗しつつあるように見えます。

まちづくりや教育は、どのような社会・文化を構想するかという探求を抜きには実践できませんが、こうしたことをめぐる議論が不十分なままで、ただ先を急いでいるように見えます。

今年は、今まで通りに『**奪われた！ 私たちの美しい図書館・歴史資料館の奪還！**』のために学習を継続していきますが、それに合わせて武雄（日本）の民主主義（特に憲法 21 条 = 集会の自由・結社の自由・表現の自由）についても議論していきたいと思います。その経過の中で「武雄の社会・文化のグランドデザイン」をみんなで探り合うことになるでしょう。

新たな課題が次々に見えてきていますが、それだけ私たち『**市民団体**』の存在・活動が求められているのだと思っています。さらにこの一年、市民学習の場を広げて行きますので、どうぞご支援・ご協力よろしく願いいたします。

2014 年 1 月 4 日

武雄市図書館・歴史資料館を学習する市民の会 コア会議から

以下は、武雄の民主主義あり方を学習するための資料です。

(毎日新聞 2014 年元旦の社説を参考に書かせていただきました。)

### 『排除と狭量ではなく、自由と寛容を！』

いま、愛国心、ナショナリズムが、政治を動かそうとしている。強い国をつくろうという流れに拍車がかかるかもしれない。

だが、強い国や社会とは、どんな姿をいうのだろうか。指導者が、強さを誇示する社会なのか。違うと私たちは考える。強い国とは異論を排除せず、多様な価値観を包み込む、分厚い民主社会のことである。「寛容で自由な空気」こそ、必要なのである。

選挙と議会の多数決があって、民主主義は成り立つ。それを否定する人はいない。ただし、「反対するなら次の選挙で落とせばいい」などと政治家が開き直ったり、多数決に異を唱えるのは少数者の横暴だ、といった主張が議会でまかり通ったりするのは、民主主義の履き違えではないのか。民主主義とは、納得と合意を求める手続きだ。いつでも、誰でも、自由に意見を言える町、少数意見が、権柄づくの政治に押しつぶされない町、それを大事にするのが、民主主義のまっとうさである。

山積する市民的課題を前にするとき、政治がなすべきことは、多様な民意を集約し、幅広い合意をつくる努力を尽くすことだろう。愛郷心とは、本来、故郷や家族などの懐かし

い場所や集団に対する、自発的な愛情である。

この町で日々、地道に、懸命に働き生きている、あらゆる人々は、みなそれぞれに町の未来を真剣に考える、愛郷者たちである。

にもかかわらず、「統治する側」が自分たちの正義？に同調する人を味方とし、行政の政策に同意できない人を、反対派のレッテルを貼って排除するようなら、そんな町は一見「いい町」に見えて、実はもろくて弱い、やせ細った町だ。

「排除と狭量」ではなく、「自由と寛容」が、今、わが町に、必要ではないのか！